キルギスにおける牧畜経営

一般社団法人北海道地域農業研究所 専任研究員　星野愛花里

中央アジアのキルギス共和国は中国の向こう側、日本とは３時間の時差のところにある（第１図）。私は2019年の１年間をキルギスの農村部にホームステイして参与観察的調査を行い、前後あわせて５回ほどの調査を行い、すっかりお気に入りの国になっている。魅了されたのは壮大な山々と美味しい食事、そして農耕の国日本では想像もできなかった遊牧文化に根差した人々の生活であった。この経験をもとにキルギス牧畜経営を紹介させていただく。

１　キルギスにおける農家とは

遊牧という言葉を使ったが、現在のキルギスの「農家」はほとんどの場合遊牧を行っていない。ステップ地帯に位置するキルギス北部では、19世紀半ばまでは氏族ごとのグループで高低差を利用した遊牧を行い、暮らしていた。しかし、ロシア帝国に編入され、さらにソ連の体制に組み込まれることで定住化と集団化を経験することになる。垂直遊牧とは夏営地から春・秋営地、冬営地と移動することであるが、標高の低い冬営地が耕地として耕転されるようになった。この地域ではロシア人が現地住民と混ざって村落を形成しており、清朝期に中国から移住してきたドゥンガン人や南部のオアシスの民なども加え、キルギスは多民族国家として存在している。人種のるつぼであり、日本人の私がいても違和感はさほどない。

耕地としての開発が進んだとはいえ、ソ連期の集団経営（コルホーズとソフホーズ）でも垂直移動による放牧地利用が行われており、経営の主要部門となっていた。また、構成員の私営部門でも家畜飼養が認められていた。山岳地帯のキルギスにおいては適切な経営形態であったといえる。1991年の独立以降はゴスプランによる分業体制が崩壊し、ショックセラピーといわれた社会主義からの急速な転換の一環として1994年から集団経営を解体して住民に耕地を分配する土地改革が実施された。中央アジアとしては最も徹底しており、耕地の75％が家族経営に配分された。場所によって耕地面積や住民数が異なるため、一人当たりの配分に差があったが、私のフィールドであるイシククリ州の東部の平地が多い地域では一世帯あたり２haほどの面積であった。農家の相続は末子相続であり農家数は増加を示しているが、他出した子弟の土地は兄弟によって借地されている。

ソ連期には集団経営の構成員として分業に組み込まれて作業に当たっていた家族経営は自営業としての経験がなく、技術面や経営面で多くの困難を抱えることになった。また、解体された多くの集団経営は赤字経営であり、トラクターなどの機械・設備は売却されてしまったため、機械の不足が慢性化した。このような状況で農業生産は大きく下落するなかで、農家はどのように経営を維持してきたかという疑問が生じる。

第1図　キルギスの地図

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/

2　小規模零細経営と放牧のための共同組織

その答えは、土地改革初期の家畜頭数の統計を見ると明らかである。集団経営に由来していた家畜は急減しており、家畜は自給用として消費されていたことがわかる。その後、家族経営が所有する家畜頭数は回復を見せており、耕地では牧草や大麦、トウモロコシなどの飼料作物が播種面積の58％を占めている（2023年値）。農家は家畜飼養を基盤としているのである。同時に、2000年代に入ると急速に増加した外国（ロシアやカザフスタン等）への出稼ぎ収入も生活の現金支出を支えていた。

実際に、私のフィールドであるイシククリ州ノボボズネセノフカ村の事例を見ると、零細な経営は耕地に一作の飼料を栽培し、羊または牛を飼養しており、経営主本人が出稼ぎへ行くことで生活が成り立っている。周りの土地を取得できた経営では食糧となる馬鈴薯が作付けされ、畜種は複数となり飼養頭数も増加している。これらの経営では冬期から春期に家畜の分娩が行われると、４月からは放牧がなされるが、これは村の家畜群を引き受ける牧夫に委託している。一方で、家畜がいなくなった村周辺では本人が耕種の作業にあたるのである。機械作業は近隣にソ連製の古い機械や新しい中国製の機械を導入した農家がいるため、村の相場の料金で作業委託をする。晩秋に村に家畜が戻ると、越冬に向けて適切な頭数とするために、雄の子畜や高齢の家畜を市場（バザール）で販売する。この時期は結婚式や宴会が多く行われるため、贈り物やふるまいに消費する家畜もばかにならない。これが多くの農家の一年である。

彼らには夏期に牧夫へ委託する外に、２つの家畜の放牧システムを利用している。一つは搾乳牛を牧夫に預ける日帰り放牧であり、搾乳牛は宅地で飼養されるため１年中利用される。村は碁盤の目状になっているため、日が昇る頃に指定の通りまで本人の牛を連れて行き、群れの移動に加える。群れは村周辺の放牧地や森林、収穫の終わった耕地で草をはみ、夕方には迎えに出る。もう一つは輪番制

写真　羊の輪番制放牧にて住宅地の通りを進む様子（11月）

で行う日帰り放牧であり、主に冬期に羊を対象として用いられる方法である（写真）。10頭から40頭を飼養する近隣農家十数戸が集まって、降雪で放牧が出来なくなるまで１日おきに交代で放牧を担当する。このような放牧システムはソ連期の私営部門の家畜飼養から生まれ、現在まで脈々と続いているのである。

一方で、農業収入を本格的に得ようと専業化する動きも見られる。一つは放牧管理が可能である上限の700頭ほどの羊や牛、馬を数十頭飼養する多頭飼育経営の出現である。ソ連期の大型畜舎を入手し、兄弟で牧畜と耕種を分担しているが、購入飼料にも依存する経営である。また、メリノ種などの優良家畜品種を導入して多頭化する経営も見られた。さらに、薬草や果樹等の商品作物を導入する農家もおり、従来もっぱら飼料生産となっていた耕地の利用にも変化が見られるようになった。

こうした新たな展開は、家畜販売による現金収入だけでなく、出稼ぎや銀行からの借入、国際支援機関による支援にも支えられている。キルギスの農家にはこのように徐々に変化が見られるが、生活基盤としてのライブストックが基本をなしており、遊牧文化は健在である。

（ほしの　あかり）